

令和元年6月3日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04079

研究課題名(和文) インクルーシブ保育における参加状態の多面的アセスメントモデルの構築

研究課題名(英文) Construction of multiple assessment model of participation state in inclusive child care

研究代表者

浜谷 直人 (Hamatani, Naoto)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：40218532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：統合保育とインクルーシブ保育の違いについて理論的に整理した。我が国の、優れたインクルーシブ保育実践を調査して、その実践の構造を分析した。最初からクラス全体が同じ活動をするように保育すると、多くの子どもが排除されることを避けられない。少数の子どもが関心を持った活動を核にして、徐々にクラス集団に活動が広がっていくことで、子どもたちが活動に参加できる状況が生成される。我が国で広く行われている一斉保育では、子どもたちが序列化されて、一部の子どもが排除されることを示した。コンサルテーションにおいて、活動が生成されてインクルーシブ保育が実現される状況をアセスメントする必要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害児をはじめとした特別な支援が必要な子どもが急増している保育現場において、健常児集団を前提にして、支援を付加することでは状況は改善されない。本研究は、多様な子どもたちが多数いることを前提にして、そこから保育を創造する過程において、心理職などのコンサルテーションがいかに貢献できるかについて提言したが、その意義は時代の要請にかなったものである。優れた実践事例にみられるいくつかの特徴は、今後、広く共通され検討されることで、どの子どもも排除されないで参加できる保育実践を構築することに寄与すると同時に、心理職によるコンサルテーションの理論においても新展開を促す意義がある。

研究成果の概要(英文)：The difference between integrated childcare and inclusive childcare was theoretically analyzed. We investigated some superior inclusive childcare practices in Japan and analyzed the structure of those practices. It is inevitable that a large number of children will be excluded if the whole class is given the same activities from the beginning. By focusing on activities with a few children's interest and spreading activities to class groups gradually, situations are created in which children can participate in activities. In same settings childcare widely practiced in Japan, it was shown that children were ordered and some children were excluded. In consultation, we pointed out the need to assess the situation in which activities are generated and inclusive childcare is realized.

研究分野：保育臨床

キーワード：インクルーシブ保育 統合保育 参加 アセスメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

障がい児保育は、1980年代以降「統合保育」と呼ばれ、個として障がい児をみるだけでなく、所属する集団との関係を見る視点が共有されるようになったが、実践の多くは、健常児集団の保育(活動)を前提にして、障がい児の発達や障がいの特徴に応じて、保育を工夫したり、特別な配慮が付加されるものであった。つまり、健常児集団の活動に障がい児を導き入れようとした。実際には、形式的に障がい児が健常児集団の場に共にいるだけで、障がい児は、放置されたり、不本意な活動を強制されているという問題(同化的排除)がある。今日、インクルーシブ保育という呼称で保育実践を再構築する時代になったが、それは障がい児だけでなく、一人一人の違いを前提にして、すべての子どもが活動に参加し、子どもたちの多様性が生きる保育実践を創造することが課題になっている。広く普及した保育現場への心理学的なコンサルテーションにおいても、障がい児だけでなく、集団の子どもの多様な参加状態をアセスメントすることが求められている。

2. 研究の目的

まず、優れたインクルーシブ保育実践において、どのような経過を辿って、障がい児をふくめたすべての子どもが活動に参加できる実践が構築・創造されるかを明らかにする。そのうえで、巡回相談のような心理職のコンサルテーションにおいて、どのように参加状態をアセスメントすることができるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

研究1 優れた実践を発掘して実践分析を行った。全国的に保育実践を研究交流している組織(全国保育問題研究会、全国合同保育研究会など)において公表された実践事例(季刊保育問題研究、ちいさいなかま、など)から、実践事例をピックアップした。同時に、すでに、実践を分析した事例から、このテーマに即した実践をピックアップした。それらの事例について、担任などの保育者にインタビューを実施し、クラスの子どもたちの関係や、活動に参加する経過を保育者とともに再構築して、インクルーシブ保育実践が構築される過程と、その際に重要な観点を抽出した。

研究2 集団づくりの実践において、長い研究蓄積がある、H幼稚園に注目して、保育観察と、保育カンファレンスに参加し、保育者などへのインタビューを実施して、障がい児が活動に参加する保育実践の特徴を、対話の質の観点から分析した。

4. 研究成果

研究1 まず、一つの典型と考えられるA実践を骨格として実践の構築過程を整理する。

A実践 複数の支援児が在籍する4歳児クラスがインクルーシブになる事例

今日、多数の支援児(障がい児を含む)が在籍するクラスが多い。多数の集団に定型的な保育を行いながら、支援児をその集団に入れようとする発想では、クラスが混乱した状態のままである。A実践では、一方で、特に動きの激しい自閉傾向の支援児(K)に一人の保育者(M)が寄り添い、Kが持っているユニークな世界の魅力にMが楽しくなって一緒に活動することが契機になって、Kのところに、他児が近づき少人数で活動し、そこからしだいに、Kが他の子どもたちの活動に興味を示すようになった。一方、もう一人の保育者(N)は、一人一人の子どもの要求を把握すると同時に、子どもたちにヒットした絵本を題材としたファンタジー遊びを少数の子どもと一緒に始める。それをNも子どもも楽しんでいると、周囲の子どもがその魅力に引き付けられて参加して、しだいに多数の子どもが参加する活動が成立した。とくに、ファンタジーの遊びでは、子どもたちが役になりきって

遊ぶことで、集団的なルールを楽しく守ることができることで、集団活動が成立した。

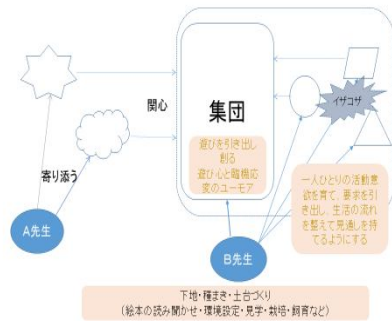


図 4歳児クラス初期の混乱したクラスにおける保育

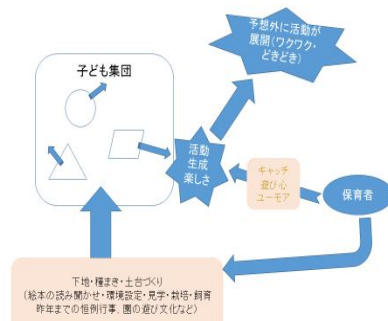


図 子どもの自発的関心と保育者の遊び心・ユーモアが響きあって(化学反応して)活動が展開する実践(初期)

この実践は、インクルーシブ保育が構築するうえで最初の転回点となる重要な点をいくつか示唆している。保育者の予定した活動に子どもを導くのではなく、支援児が持っている魅力的な世界に保育者が興味をもち楽しくなることが実践の転回点となる。最初から多数の集団での活動を作るのではなく、まず、少数による局所的な楽しい活動が生まれることが実践の核になる。予定通りに論理的に実践を構築するだけではなく、予想外の出来事を活かす柔軟さが、子どもが参加できる活動を生み出す。とくに、ファンタジーの世界で遊ぶ活動では、支援児が本来持っている社会的な良質な部分を素直に出すことを可能にしてくれ、それをくぐることで、日常の活動に参加できるようになる。その意味で、ユーモアや探求心を保育者がもつことが必須である。

A 実践では、その後、いくつかの行事への取り組みを契機に、子どもたちの参加の様相が進化する。とくに、行事において、それぞれの子どもの持ち味が発揮できる場面が出現し、お互いに、その持ち味によって助け合ったり、協力したりすることができることで、お互いを認め合うことができるようになる。なんでもよくできる子どもと、できない子どもと言うような序列的な関係から成長して、それぞれの子どもの、「・・・だけど、・・・を任せるとすごい、・・・についてはよく知っている」と言うように、お互いを多面的に理解できるようになる。それが集団活動を豊かなものにすると同時に、どの子どもも参加できる活動が持続的に生み出されていく。そうして、結果的に卒園児には、やんちゃだったり落ち着きない状態になることはあっても、子どもたちがお互いを認め合い、一緒に活動することの楽しさを知って、お互いにつながり、協力し合うようなクラス集団として成長する。

一斉保育的発想、つまり、最初から、クラス全体の子どもが参加できる活動を導入しようとする、結果的に、参加できない子どもが出現して、子ども間に序列が生まれたり、排除される子どもが出てくることは避けがたいことが、事例研究から示唆された。

研究2 H 幼稚園における子ども間の対話によってインクルーシブ保育が実現される構造

H 幼稚園では、3歳児の2人組から始め、4歳児の3人組、5歳児の数人でのグループ活動を重視し、グループで責任をもって活動をやり遂げることを徹底的に保育者が支えて、誰一人として排除されることのない集団を作ってきている。また、ほぼ毎日、子どもの会話、活動内容についてのエピソードを題材にして園内のカンファレンスを持ち、子どもと保育者を支えている。さらに、保護者とも、定期的に話し合いをしながら、子どもたちの状態と保育実践について共通理解を持つようにしている。それらのことが総体として、子どもたちの活動において、誰一人として排除しない状況を実現している。

保育者から子どもたちへのかかわりを、対話という観点から分析した結果、生活プログ

ラムより、共同作業プログラムにおいて、子どもたちの会話を促し、対話的関係を生み出し、その関係を拡大していくよう構造化され、活動構造は、単に会話を促すことだけではなく、それぞれの考えを可視化しイメージを共有すること、他者の考えや表現に注目し、理解しようとする姿勢を育み、さらに、目の前の活動において自分や他者が共にどうありたいかを考えられるようになっていくことが明らかになった。また、対話場面に対する説明や解釈、疑問、提案、気づきは、循環しながら進行するのではなく、対話場面では誰かの発言に対して、別の誰かがいずれかの反応を示し、それにまた別の誰かが反応する、といった具合に進む。そうした議論の結果、その対話場面における子どもの関係性が進むことが明らかになった。

コンサルテーションモデル構築に向けて： 研究1と研究2を総合して考察すると、支援児の持ち味が生きる実践をアセスメントが重要であり、実践が構築されていく過程を深く理解したうえで多面的なアセスメントが求められる。局所における仲間関係の活動が楽しくなることが重要であり、論理的・因果的な説明だけでなく、ファンタジーの世界を楽しむという視点を取り入れ、それを発見し評価するアセスメントが必要である。保育者を含む職員集団の持続的・継続的なカンファレンスや研鑽・研究を評価し支えることにつながるアセスメントが必要である。以上のようなアセスメントが可能になるためには、コンサルトである相談員が保育実践の多様さ・豊かさ・歴史などについて学ぶ姿勢が不可欠である。最後に、子どもと保育者が互いにその存在を尊重し、交わることで、予想を超えた実践が展開し、そこに新たな意味が生成していく、そういう創成の場に立ち会うようなコンサルテーションが、インクルーシブ保育を下支えする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

浜谷直人 2018 統合保育からインクルーシブ保育の時代へ 首都大学東京人文学報
教育学(514) 1-48 (査読なし)

他 17 件

〔学会発表〕(計 18 件)

Kiyone Ashizawa, Naoto Hamatani. The process of collaborative dialogue among
nursery school teachers in a conference on children with special needs.EECERA2018.8

他 17 件

〔図書〕(計 7 件)

浜谷直人・芦澤清音・五十嵐元子・三山岳 2018 多様性がいきるインクルーシブ保
育：対話と活動による豊かな実践に学ぶ ミネルヴァ書房 全 231 p

他 6 件

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：芦澤 清音

ローマ字氏名：(ASHIZAWA, Kiyone)

所属研究機関名：帝京大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：20459382

(2)研究分担者
研究分担者氏名：五十嵐 元子
ローマ字氏名：(IGARASHI, Motoko)
所属研究機関名：帝京短期大学
部局名：帝京短期大学
職名：講師
研究者番号（8桁）：30468897

(3)研究分担者
研究分担者氏名：三山 岳
ローマ字氏名：(MIYAMA, Gaku)
所属研究機関名：愛知県立大学
部局名：教育福祉学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：80582858

(4)研究分担者
研究分担者氏名：飯野 雄大
ローマ字氏名：(IINO, Takehiro)
所属研究機関名：白梅学園大学
部局名：子ども学部
職名：特任講師
研究者番号（8桁）：00737033

(5)研究分担者
研究分担者氏名：田中浩司
ローマ字氏名：(TANAKA, Kouji)
所属研究機関名：首都大学東京
部局名：人文科学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：50535036

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。